

シネマ・チュプキ・タバタ代表
平塚千穂子

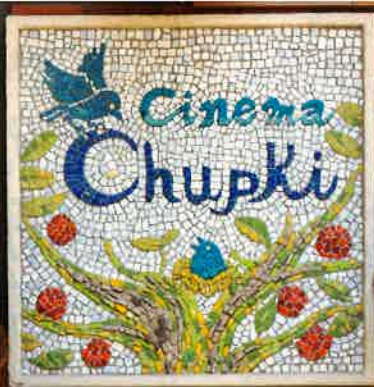
Chihoko Hiratsuka

私だけ聴こ

シネコヤ代表

竹中穂子

Shino Takemachi



いつか、映画館を作りたい！ そんな夢を現実にした、二人の女性がいる。日本初のユニバーサルシアターである「シネマ・チュプキ・タバタ」。そして「映画と本とパンの店」というコンセプトを打ちだした「シネコヤ」。かねてより親交を重ねてきた支配人の二人が、小さな映画館を運営することの苦勞と、それを凌駕する魅力について語り合う。

シアター支配人対談②

小さな小さな映画館を 立ち上げて

づながりを 生む場所。

若木康輔・文

text by Kousuke Wakaki
photographs by Shinsuke Oda

上・シネマ・チュプキ・タバタの前にて。
中央のチュプキ看板は、
「目が見えなくても触ってわかるものを」との思いから、
モザイクアーティストの岡田七歩美さんに依頼した

誰でも楽しめる映画館、
パンと本のある映画館。

——「シネマ・チュプキ・タバタ（以後、チュプキ）」は上映する全作品に日本語字幕と独自で制作した音声ガイドを

付けて、聴覚障がい者も視覚障がい者も一緒に映画を楽しめる環境を作った、日本初で現在唯一のユニバーサルシアターです。「シネコヤ」も、一棟のなかに約三千冊の本を自由に読める一階のライブラリーと、二階に映画館があるのがユニークです。前例のないスタイルの映画館を始めた理由を教えてください。

たけなご しょうこ 一九八四年神奈川県生まれ。東京工芸大学卒業。学生時代に地元映画館のアルバイトスタッフを経験し映画の魅力にはまる。その映画館の閉館を受け、映画+αの空間づくりをめざし、「シネコヤ」として本格的に活動を開始。
二〇一三年からレンタルスペースで毎月一回「フードや会場演出に工夫をこらした映画イベント」を主催。クラウドファンディングで資金を集め、一七年鶴沼海岸商店街の一角に「映画と本とパンの店」をコンセプトにした常設映画館「シネコヤ」をオープン。

ひらつか ちほこ 一九七二年東京生まれ。早稲田大学卒業。映画館「早稲田松竹」のアルバイト勤務を経験する中で、映画館設立の夢を抱く。チャップリン映画『街の灯』のバリアフリー上映を企画したことをきっかけに、二〇〇一年にバリアフリー映画鑑賞推進団体CityLightsを設立。以後、障がい者の映画鑑賞環境づくりに携わり、一六年に日本初のユニバーサルシアター「CINEMA Chupki TABATA」シネマ・チュプキ・タバタ」を設立。第二十四回「レンケラー・サリバン賞」など数々の賞を受賞。

平塚 「目の見えない人も映画を見た
いと思っていた」。それを知ったこと



屋内にしながら野外上映を楽しんでいるような、「森のなかにあるシアター」をイメージした内装。世界的な音響監督・岩浪美和さんの協力を仰ぎ、「音が目の代わりを果たす」ような、360度音に包まれるフォレストサウンドも実現。最後列はすべて車いす用スペースにしたことで、車いす利用者もスクリーンのほぼ正面から鑑賞することが可能になった。後方には、親子鑑賞室も設けている



シネマ・チュプキ・タバタ

【開館年】2016年 視覚や聴覚に障がいがあっても、車いすでも、小さな子を連れてたひとも、みんなが安心して映画が楽しめる日本初のバリアフリー映画館(ユニバーサルシアター)として開館。イヤホン音声ガイドや字幕付き上映をはじめ、車椅子スペースや親子鑑賞室も完備。新旧さまざまな作品を上映している。田端駅から徒歩7分、田端駅下仲通り商店街に立地。

■北区東田端2-8-4/TEL03-6240-8480

11月の上映予定

『荒野に希望の灯をともし』(監督・谷津賢二/2022年)、

『響け!情熱のムリダンガム』

(監督・ラーズ・ブ・メーナン/インド/2018年)

動員ベスト3

1位<人生フルーツ>(監督・伏原健之/2017年 上映2022年)

2位<プロメア>(監督・今石洋之/2019年)

3位<この世界の片隅に>(監督・片瀬須直/2016年 上映2021年)



上・チュプキで上映する映画は、常に日本語の字幕がついている。加えて、全席のひじ掛けに、イヤホンジャックとコントローラー(写真)を設置。ここにイヤホンをつなげば、映画本編音声に加えて、音声ガイドが聞ける。もちろん、視覚障がいがない人も、ひとつの鑑賞ツールとして使用可能だ。下・振動で音を体感できる、重さ約1キロと軽量な「抱っこスピーカー」も。聴覚障がい者も、豊かな音を感じることができる



がチュプキの原点です。二〇〇一（平成十三年）年にシティ・ライツというボランティア団体を立ち上げ、視覚障がいの方のために映画鑑賞の環境を作る活動を長年やっていくうち、聴覚障がいの方も鑑賞に困ることがない、映画がみんなを受け入れるような場所を作りたいと考えるうち、ユニバーサルシアターのコンセプトが生まれました。条件の合う建物を田端で見つけるまで、百以上の物件を探しましたけど。竹中 私はひとつ目の物件だったんですよ。

平塚 なんて対照的な（笑）。シネコヤは羨ましいですよ、大人の夢を形にした、レトロで贅沢な空間で。

竹中 最初はネットで探すくらいしかできなくて、したらたまたま内装の写真付きで物件が出ていたんです。カンドスタジオという、鵜沼海岸駅前の商店街にある昔ながらの写真館。すごく素敵で、内見だけでもしてみようというので、その不動産屋の担当者がかんだんからミニシアターに行く人だったんですよ。条件の交渉などを熱心してくれて、とてもラッキーでした。カンドスタジオの看板は、今でも残っています。

平塚 やりたいと思いつけてると、救



チュプキで上映する作品は、配給会社が公式の音声ガイドや日本語字幕を作っていない場合、一から自前で制作する。例えば音声ガイドは、チュプキ2階の会議室に視覚障がい者をモニターに迎え、侃々諤々の議論を経て制作。写真は、『このころの通訳者たち What a Wonderful World』の1シーン。この映画では、視覚障がい者、聴覚障がい者、双方を集めて議論、対話をしながら、音声ガイドをつけていく平塚さん（写真左）たちの奮闘が描かれている。写真右は、『手話』部分、迫力ある演技で音声ガイドする女優の彩木香里さん（©Chupki）



「このころの通訳者たち What a Wonderful World」（監督・山田礼於/2022年）。耳の聴こえない人にも演劇を楽しんでもらうために挑んだ、3人の舞台手話通訳者たちの記録。その映像を、目の見えない人にも伝えたいと模索する、平塚さんたちチュプキの奮闘を記録した2部構成のドキュメンタリーだ。チュプキに加えて、新宿K's cinemaほか全国順次公開中（©Chupki）

誰もが鑑賞に困ることがない、映画がみんなを受け入れるような場所を作りたい。

平塚千穂子

い主がふつと現れるんだよねえ。竹中さんは私が初めて会ったときから、「カフェがある映画館にしたい」といってイメージをハッキリ持っていたしね。

竹中 映画館だけじゃない空間にしたことは最初から考えていましたね。「映画と本とパン」にしたのは、自分が古い喫茶店や古本屋も好きだったから。好きなものの寄せ集めなんです。ふつうは見たい映画があるから映画館に行くけど、違う形もありじゃないかと。のんびり本を読みながら時間を過ごすのが目的というお客さんも増えて

きているので、コンセプトは少しずつ浸透してきているところかな。

—— どちらも、商店街のなかに本当によく馴染んでいますね。

平塚 チュプキは障がいを持つ方が見に来る常設館にするわけですから、理解を得られるか少し心配だったんですけど、すぐ応援するムードを作ってく

ださったんです。商店街も高齢の方が多くて、他人事じゃないよなって。今では上映スケジュールを回覧板で回してもらったり掲示板に貼らせてもらったり、すごくありがたいです。

上映する映画が新しいお客と発見をくれる。

—— チュプキもシネコヤも上映作品は多彩ですが、番組編成にこだわりは？

竹中 シネコヤでは、地域のご年配の



チュプキのロビー天井に描かれた壁画「チュプキの樹」。
画家の根本有華さんの作品。
枝先には薄いベニヤ板でつくった「チュプキの葉っぱ」が茂っている。
開業時に行ったクラウドファンディングの支援者の名前が記されており、「感謝の気持ちをいつも忘れずにしています」(平塚さん)

方に喜んでもらえる作品と、若い人に来てもらえるきっかけになるような、ポップな作品の両方あることを意識していますね。ただシネコヤは席ごとにテーブルがあり、パンを食べたりコーヒを飲んだりしながら映画が見られるという、少しラグジュアリーな空間の演出をしているので、それに合う作品が優先になります。ホラーやバイオレンスなどのジャンルはシネコヤでは難しいかな。

竹中 ほんと。「どの映画入りました?」みたいな相談、よくしましたよね。——チュプキのお客さんは、社会や環境に問題意識を持った映画を熱心に見てくれるのでは。今年ドキュメンタリー映画『杜人』環境再生医 矢野智徳の挑戦 (監督・前田せつ子/二〇二二年) が好評で、八月にも追加上映されましたね。

平塚 『杜人』はよく来てくださるお客さんにすごく喜ばれました。ユニバーサルシアターである点や、館名のチュプキを、月や太陽など自然界で光るものを表すアイヌ語からもらっているのもあって、ここでこそ見る意味のある映画だとまで言っていたらいい。「杜人」のような映画の動員がよいのは確かです。

ただ、そのジャンルばかりに固まり過ぎていけないだろう……と思っっています。シテイ・ライツを立ち上げたとき、視覚障害者の方々が一番求めているのは『ハリー・ポッター』シリーズなど今人気の映画を見たい、ということだったんです。話題に入れない疎外感を埋めるのが大きな使命だったんですよね。だからチュプキでもアニメなどのエンタメ作品を入れていきます。

——エンタメ作品でも、音声ガイドと日本語字幕を付けるんですよ。

平塚 もちろん、チュプキで上映する

映画にはすべて用意します。労力はかかるけど、見えない人、聴こえない人がどう感じるのかを教えてもらい、想像を働かせながら作っていく作業は、チュプキにとってすごく大事なんです。

最近では、夏休みにアニメ『劇場版 ソードアート・オンライン』の第一作『オーディナル・スケール』(監督・伊藤智彦/二〇一七年)と、第二弾の『プログレッシブ』(監督・河野亜矢千/二〇二一年)を上映したんですよ。音響監督の岩浪美和さんがチュプキの音響をセッティングしてくれた方で、その岩浪さんの紹介で、メインキャストの声優・戸松遥さんに音声ガイドを吹き込んでいただいた。

竹中 へえ、それはありがたいお話。

平塚 その音声ガイドをアニメファン、声優ファンが利用して聴覚障がい者の方と一緒に映画を見たら、こっちが驚くほど新鮮に受け止めて、クチャコミで宣伝してくれてね。チュプキの場合、そんな嬉しい化学反応はむしろエンタメジャンルのときのほうが起きやすいんだあって。

竹中 シネコヤでも、今のお話とはまた違う角度で客層の拡がりを感じる映画がありました。藤沢市内にある福祉施設の日常を描いたドキュメンタリー映画『かくやびより』(監督・津村和比古

/二〇二三年)です。お披露目は地元のシネコヤでやりたいと監督に言っていたら、当初は関係者に喜んでもらえればくらいの気持ちで春に期間限定で上映したら、連日満員。二ヵ月近く延長になったんです。八月にもアンコール上映をしたほどで、地元のコミュニティと繋がっていくのは地方のまちなかの映画館にとって大事なことだと気付かされました。シネコヤにとって節目の映画になると思います。

——節目の映画といえは、平塚さんがプロデューサーをつとめた『ここらの通訳者たち』(監督・山田礼)が十月に公開されたばかりです。聴覚障がい者に演劇を楽しんでもらうための舞台手話を紹介した短編ドキュメンタリーがまずあって、その舞台手話通訳者の存在を視覚障がい者に知ってもらおうと手話の音声ガイドを作る、前例のないケースを実現する物語です。

平塚 とにかく大変でしたけど……。それぞれ違う障がいを持つ人たちが議論し合いながら形にしていくなかで描いていますから、ユニバーサル上映の目的を伝える大きなツールになってくれると期待しています。それに聴覚障がい者の観劇支援をしているNPO法人TAInetの紹介も兼ねていて、映画に限らず、どの文化・芸術でも必要なアクセシビリティや、みんなで見



シネコヤ

【開館年】2017年

「映画と本とパンの店」というコンセプトのもと開館。

およそ3000冊に及ぶ映画に関する小説や書籍、

昔懐かしい旧作のパンフレットが壁付けの本棚に並び、

国内外の新旧作を上映し、

映画を多角的に楽しめる空間となっている。

■神奈川県藤沢市鵠沼海岸3-4-6/TEL0466-33-5393

11月の上映予定

『秘密の森の、その向こう』

(監督・セリーヌ・シアマ/フランス/2021年)など。

動員ベスト3

1位〈人生フルーツ〉(監督・伏原健之/2017年 初上映2017年)

2位〈日は是好日〉(監督・大森立嗣/2018年 上映2019年)

3位〈かぐやびより〉(監督・津村和比古/2022年)



左・竹中さんは、「草木や花で彩り、喫茶店や図書館を設けて

2階がシアター」という、自分が理想とする映画館のイメージを、

イラストレーターに頼んで1枚の絵にしてもらった。

この絵をもってまわったところ、理想とする物件に出会えたという。

絵は現在、シネコヤの1階に飾られている。

下・ゆったりとした、ラグジュアリーなソファと椅子、机が並び、

ドリンクとパン、スイーツを食しながら鑑賞が可能だ



地域のコミュニティとつながっていくのは
地方のまちの映画館にとって大事なこと。

竹中翔子



『かぐやびより』
(監督・津村和比古/2022年)。

障がいのある人たちが通所する、
福祉施設「さんわーくかぐや」

(神奈川県藤沢市)。

農作業と創作活動が中心の、
かぐやでの人びとの“くらし”を3年半、

優しい眼で記録した。

地元が同じシネコヤで封切り、

アンコール上映もされた

ることの根本的な価値観を伝えられる映画だと思うので、大切に届けていかないと。地方の劇場さんには私が営業しています。(笑)

映画館経営は大変！
それでも広がる知恵と野望。

——シネコヤは映画館のなかにパン屋がある。経営面でプラスの面は大きいですか。

竹中 パンは納品してもらって委託販売という形なんですけど、実はパン自体は大きな収益ではないんです。でもパンと一緒にドリンクも注文してもらえますよね。このドリンクでかなり助かっています。

平塚 なるほど。チケット収入だけだと本当に大変だもんね。

竹中 飲食を提供するのは、地方で映画館だけでやっていくのは難しいから。また、個人商店の規模でできるモデルケースを作りたかったのも大きな理由なんです。平塚さんの素敵な話の後で言うのはイヤなんだけど(笑)。

ほかの人にシネコヤのスタイルを踏襲してもらおうときは、併設するのはパン屋じゃなくてもそのまちに合うものいいんです。どのまちにも映画館と本屋があった時代のように、徒歩圏内、自転車圏内で人生を変えるような映画に出会えることがすごく重要だと思っているので。そういう映画はやっぱり

ミニシアター系の作品が多いでしょ？

平塚 私も、人生に寄り添ってくれた映画はミニシアター系だった。そういう映画をお客さんの心に残せたときの手応えは……まあ、映画館をやっている冥利だよ(笑)。DCP(デジタル・シネマ・パッケージ) 導入のクラウドファンディングも、そんな映画をもっとチユプキで上映したくて募りました。

——DCPはフィルムやディスクに代わる、デジタルデータによる映写の国際規格で、現在は国内でもほとんどの映画館が導入しています。

平塚 そう、チユプキはまだ入ってなくて、上映したくてもできない映画が増えていくんです。たくさんの方からクラウドファンディングで支援をいただいて、目標金額を達成することができました。ユニバーサル上映の普及はまだまだこれからのので、劇場を存続させないことには……という使命感も、どうしても私の場合は伴ってきますから。

竹中 平塚さんにはこれまでもいろいろと相談に乗ってもらってきたけど、改めてユニバーサルシアターってすごいな、これこそ生活圏内になければいけないものだなって感じているんです。「かくやびより」を上映したとき、施設(編集部注:「かくやびより」に出てく

る福祉施設)の利用者には映画館に一度も行ったことがない方もいるから貸切上映の日を設けてみたんですけど、これが小さな映画館だからこそできることなんだな、と強く思ったので。これからシネコヤでできることを考えていくとき、ユニバーサルシアター的な発想をもっとシネコヤにも取り入れていきたいです。

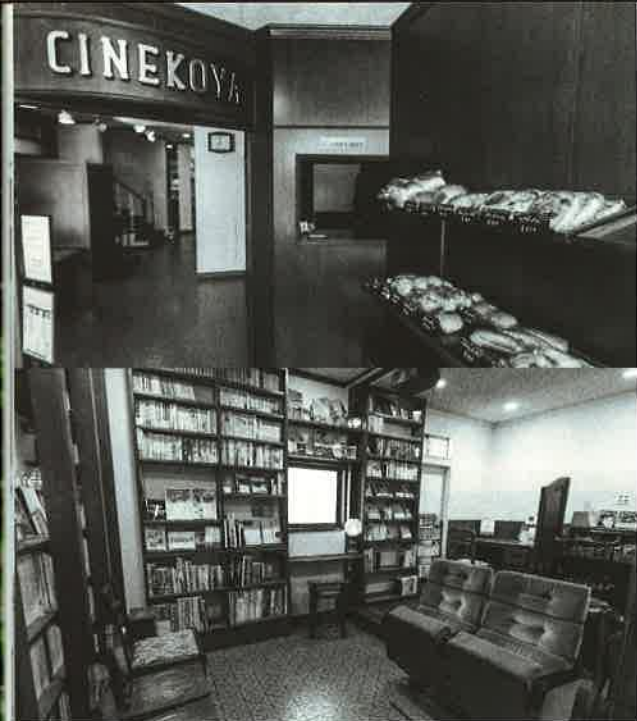
平塚 うんうん。ユニバーサル上映とは……と構えて考えてもらう必要はあまりなくて、そうか、こういう用意をすれば今まで映画館に来られなかった人に来てもらえるんだなぐらいの感覚で広がってもらえればいいな。

竹中 平塚さんはほかに、チユプキを今後もっとこうしたいっていうのはあるんですか？

平塚 ロビーが狭いから待合スペースがすごくほしい。上映時間より早く来た方に駅まで戻してもらおうが申し訳なくて。それに一スクリーンって辛くない? もう少し幅広く上映作品の編成を組みたくなったときに。

竹中 えー、二スクリーンほしいってこと?

平塚 完全な映画館ではなくても、シネマカフェ的なさ。見た後そのままおしゃべりできるような。だから近所に空き物件が出ないか、最近はいつても目を光らせてる。(笑)



上・シネコヤの入り口を入ってすぐに、パン屋スペースが。神奈川県山北町に工房を持つ「Desture」がつくるパンを、木金土日の12時ごろから販売(売り切れ次第終了/天候などで休みの場合もあり)。なお、コーヒーなどドリンク、フードやスイーツも充実。コーヒー「シネコヤモカブレンド」は、鶴沼海岸商店街「カフェ香房」の自家焙煎珈琲で、シネコヤをイメージしてブレンドされたもの。
下・シネコヤ1階の図書室。約3000冊の図書が並ぶ。喫茶&図書室のみの利用も可能